

## 「中国文学論集」の発刊によせて

目加田， 誠  
九州大学名誉教授， 早稲田大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/9828>

---

出版情報：中国文学論集. 1, pp. 1-2, 1970-05-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 「中国文学論集」の発刊によせて

目 加 田 誠

かつて九大の中国文学科には、戦争中、殆ど学生がいなかった。きわめて少数の学生も、戦場に駆り出されて、ある者は遂に帰らなかった。戦後われわれは、敗戦のショックと、一夜にして何もかもひっくり返った世相の大変動に遭遇して、いったいわれわれは、これからどういう風に生きてゆけばいいのか、まず自身を作り革めることから始めねばならぬ、と思った。これはしかし、言うに易く、しかも自分の心をどう鍛え直すべきか、いわば暗中模索のうちに、そのことを真剣に考え求めたのであった。

終戦とともに、中国文学科の学生は急に増したが、その人々も皆同じ思いであった。われわれはまずあの戦争に抗しぬいて、新らしく蘇った中国の強い精神と、そのよって来たる深い伝統文化を理解せねばならぬ。それぞれが日本人の一人として、中国に対して、強く反省せねばならぬ。中国文学の研究も、ただ学問のための学問でなく、もとより趣味や道楽でもなく、ぜひともそこから何かを求めねばならぬ、それにはまず中国の文学を新旧を問わず、もつともつと読まねばならぬ、と思ったのである。

そこで学生諸君とともに、魯迅を読み、郭沫若を読み、抗日戦中の中国作家の作品を読み、さらには古典文学についても、中国に於て、それがいかに読まれているかを知り、そして自分自身の心で正しく理解しようとした。そこで学生諸君とたびたび問題を出しあつては討論し、私の家にも集つて、議論はいつも深夜に及んだ。当時は皆そういう気持ちであり、われわれは皆、同志であった。

そのうちに、これから月に一度、日を含めて座談を持つと、九大研究室のみならず、他の大学の人々をも誘つて一緒にやろう、ということになり、「中国文芸座談会」と称して、教官学生一緒に研究発表と懇談の集まりを始めた。その第一回は、昭和二十六年五月のことであった。それがかなりつづいた後、今度はさらに、各人が読み、考えたことを書いて、雑誌を発行し

ようではないか、ということになり、これを「中国文芸座談会ノート」と名づけ、昭和二十九年九月、第一号をガリ版で創刊し、第十号以後はプリント印刷にかえた。

この当時の諸君の情熱を、私はいままも生涯のよい思い出としている。しかし、それを何年かつづけているうちに、研究室の空気もいくらか変わり、思想的にも混乱があり、学生諸君の気風もさまざまになって、ノートの刊行も次第に間遠くなり、始めの頃は、皆、書きたくて進んで順番に書いたものが、後には原稿を催促してもなかなか集まらぬようになった。各自がほんとうに訴えたい心があつてこそこの雑誌は意味があり、それを義務として重荷に感ずるようになっては意味がない。また学術論文なら「九州中国学会報」や、「日本中国学会報」もあることだ。始めの精神が薄れてきては、もはや無理して続けることもあるまい、と思つて、一旦「中国文芸座談会ノート」は停刊した。

その間、世の中の事情もかわり、中国文学については、各大学に若い研究者が続々と現われ、各大学から季刊・年報が発行され、目ばしい論文も多く現われるようになった。そして各大学の人々から、九大の「中国文芸座談会ノート」はどうしているか、といつも尋ねられた。このノートはささやかなものではあつたが、かなり多くの人々の注意を引いたものであつたことはここに記しておきたい。

この時私は九大を去り、あとに気鋭俊秀の岡村教授が中国文学科の主任となられ、研究室の空気も一新してひきしまった。岡村教授の指導のもとに、今や九大中国文学は新らしく発足しはじめた。ここで研究室諸君・卒業生諸君の間に、旧「中国文芸座談会ノート」を発展的に解消して、今度新らしく「中国文学論集」を発刊されるという嬉しいことを知つたのである。

顧みれば、「中国文芸座談会」は、時にしばらく中断することはあつても、今日まで、実に通算百十五回、ノートの方は、これも次第に停滞しがちになりながら、十七号を重ねた。実によくつづいたものである。

かつて「中国文芸座談会」を発起し、熱意を以てこれを推進した人々も、今では皆中堅の研究者として、それぞれの職場で活躍し、それぞれの研究をすすめている。このたび研究室に再びこういう気運がもり上つて、新しい雑誌が生れるときいて、欣びに堪えぬのは、私ばかりではない。今後は岡村教授を中心に、じっくり落ちついて地についた研究論文が、若い人たちの手によって、ぞくぞくと発表され、九州地方を根拠とする中国文学研究の旗幟が高らかかげられることを心から祝し、且つ大いなる期待をかけるものである。